

興野の貴狐天王

おかし、興野の那須家の一族が築いた味城みじょうというお城があったと。味城の七代目の城主興野伊隆ただたかは、烏山城主那須資晴すけはるに従い、数々の合戦に出陣し、目覚ましい手柄を立てた。

それで、伊隆は、いままでの興野、大沢に加えて横枕村を与えられ、三カ村を治める有力な城主となったと。

ところが、天正十八年（1590年）、那須資晴は、秀吉から小田原城攻めに参陣せよとの書面を受け取りながら、それに従わなかったんだと。そのため、資晴は烏山城を追われ、伊隆もまた、千本の長安寺というお寺に移り住むことになったんだと。

ある秋の日、伊隆が寺の近くの野道を歩いていると、四、五人の子供が竹箆を背負って山から下りて来た。見ると、子供たちは子狐の首を藤づるでしばり、引きずったり、棒でたたいたりしていたんだと。

伊隆ただたかは、子どもたちに、

「これ、こんな小さな狐をみんなでいじめてはかわいそうではないか。おじさんがお前たちにお金をやるから、その狐をゆずっておくれ」と言っ、子狐を助けてやったと。

伊隆は、子狐に向かい

「我は四十歳になるが、まだ一人も子供がいない。お前に、稲荷大明神の使いとして神通力があるのなら、我に子供を授けよ。さすれば永く氏神として救うであらう」と言っ、放してやったと。子狐は後をも見ずに、一目散に山の方へ行ってしまったと。

その年の暮れ、伊隆のところの玉のような男の子が生まれ、その上、翌年になると興野へ帰ることが許され、再び味城の城主となることができたんだと。さらに、子供が次々と生まれ、八人もの子宝に恵まれたんだと。伊隆は、これも皆、稲荷大明神の賜物と、子狐との約束どおり、味城のうしろに立派なお社を建て、「貴狐天王」と名付け、氏神として敬い祀まつることになったんだと。

そのお社は、今でも興野大橋の東の竹やぶの中にひっそりと祀られているんだ。

おしまい